

新除草・調節剤

クサガード® 水溶剤
アロキシジム除草剤

事務局 日本曹達株式会社
(取扱メーカー) クミアイ化学工業株式会社
北興化学工業株式会社
八洲化学工業株式会社
三笠化学工業株式会社

対象作物：大豆・小豆・菜豆・てんさい・かんしょ・キャベツ(春～夏播)・にんじん(春～夏播)・たまねぎ・桑。

成分・作用特性：本剤は、3-(1-アリロキシアミノブチリデン)-6,6-ジメチル-2,4-ジオキソシクロヘキサンカルボン酸メチルのナトリウム塩を75%含有する水溶剤である。

本剤は、広範囲の広葉作物の幼苗期から生育期間中に使用でき、処理適期幅が広く、しかも広葉作物の茎葉に薬液がかかっても、薬害の心配がない。

メヒシバ・ヒエをはじめとする一年生イネ科雑草の1葉期から5葉期までに散布すると、優れた殺草効果を発揮する。また、多年生イネ科雑草には、新葉を枯らす作用を利用して、抑制的な使用ができる。

散布後の降雨に強く安定した殺草効果があり、土壌中では短時間で分解され、不活性化して効力を失うので、後作物への影響がない。

殺草のメカニズム：本剤は、非ホルモン型・吸収移行型の除草剤で、主としてイネ科雑草の茎葉部および根部から吸収されて生長点に移行し、伸長抑制をおこし、枯死させる。この点から、殺草の発現は遅効的で、新葉の基部や根部

の先端より枯死させる。

毒性：急性経口毒性は、ラット(♂)に対し、LD₅₀ 5,200 mg/Kgと低く、普通物である。魚毒性はA類で、鳥類・ミツバチに対する安全性も高い。

使用方法：登録されている使用基準は、次の通りである。

作物名	適用雑草名	使用時期	適用土壌	使用量(g/10a)	散布液量(L/10a)	使用方法	本剤及びアロキシジムを農薬の使用回数
大豆 小豆 菜豆 落花生 てんさい かんしょ キャベツ(春～夏播) にんじん(春～夏播) たまねぎ	イネ科畑地一年生雑草 〔スズメノカタビラは除く〕	雑草生育期 〔イネ科雑草2～5葉期 北海道は2～4葉期〕	全土壌	100～150	100	茎葉散布	1回
桑		夏期雑草生育期 〔草丈20cmまで〕		300～400	200～300		3回以内

使用上の注意：①広葉雑草およびカタクリガサ科雑草には効果が期待できないので、イネ科雑草(スズメノカタビラは除く)優占圃場で使用する。なお、広葉雑草等が混在する場合は、これらの雑草に有効な除草剤との体系で使用する。②イネ科雑草の生育期に有効であるが、雑草が大きくなりすぎると効果が劣るので、時期を失ないように均一に散布する。③遅効的であり、イネ科雑草を完全に枯死するまでに5～10日を要するので、誤ってまき直しなどしないように

新除草・調節剤

注意する。④冬期の低温期や出穂期以降など、雑草の生育が停止している場合には、効果が劣ることがあるので、使用をさける。⑤イネ科作物には薬害がでるので、周囲にイネ科作物がある場合は、薬液が飛散しないように注意して散布する。⑥本剤は水溶剤であり、少量の水で糊状にねると溶けにくくなるので、所定量の水に直接加え、充分かきまぜ、完全に溶かしてから散布する。⑦吸湿性があるので、開封後の薬剤は、必ず密封して、乾燥した冷暗所に保管する。

バスファミン[®] 水和剤
PAC・IPC 除草剤

(取扱メーカー) 北海三共株式会社

対象作物：たまねぎ(春播移植栽培)。

対象雑草：畑地一年生雑草。

成分・作用特性：本剤は、PAC：1-フェニル-4-アミノ-5-クロルピリダゾン-6……20%とIPC；イソプロピル-N-(3-クロルフェニル)カーバメート……20%の混合剤で、剤型は水和剤である。

本剤は、西ドイツBASF社開発のPACと、古くから畑作・園芸作物に使用されているIPCの混合剤で、PACは雑草の発生前から発生初期に有効で適用雑草幅が広く、IPCは土壤処理効果向上のために配合されている。

たまねぎの移植活着時期は、雑草の発生前から発生初期に当たるため、土壤処理効果と雑草処理効果の双方が要求され、本剤はこの双方を兼ね備えた薬剤である。

また、スベリヒユ・タデ・ハコベなどに対し

高い殺草効果を示し、移植活着後の処理で安全に使用できる。

使用方法：登録されている使用基準は、次の通りである。

作物名	適用雑草名	使用時期	使用量 (g/10a)	使用法
たまねぎ 〔春播移植栽培〕	畑地一年生雑草	移植活着後 雑草発生前 ～発生初期	400 ～600	100ℓの水 量(10a当り) で土壌全面 散布

使用時期については、この時期が主体となるが、中耕除草後に使用したり、他剤との体系処理など、種々の活用方法がある。

使用上の注意：①活着が不十分であったり、軟弱徒長苗を植えた場合には、初期生育の劣ることがある。②高薬量使用後の降雨や極度の砂質土壌に使用の場合、薬害を生ずることがある。③雑草が大きくなりすぎると効果が劣るので、雑草の稚幼期に使用する。④高温時に使用すると、IPCの気散が多く効果が劣るので、夕方涼しい時間に使用する。⑤土壌が乾燥していると、土壤処理効果の低下により効果が発揮できないので、適湿の時に散布する。⑥ツユクサやイネ科の雑草が優占する畑では効果が劣るので、高い方の薬量を使用するか、他の薬剤との体系処理で使用する。⑦他の作物に薬液がかかると薬害がでるので、近くに他の作物がある場合は薬液がかからぬように注意する。

本誌掲載原稿の募集

本誌を愛読されている皆様より、原稿を募集しておりますので、ご寄稿下さい。内容は、除草剤・生育調節剤に関する記事であればよく、400字詰原稿用紙で20～30枚位、図・写真の挿入も可。原稿料は、当協会の規定によりお支払いいたします。